

知識を兼ね備え、患者さんの生活に目配りができ、心に寄り添うケアを行える看護師こそがキーパーソンであると考え、看護師を「THP（トータルヘルスプランナー）」としてチームの中心に据える「THPケアシステム」を2008年に構築した。また、小笠原内科で独自に開発したアプリ「THP+（ティエイチビープラス）」を用いて、スタッフだけではなく、患者さんやその家族もスマートフォンやタブレットで往診や訪問看護などの情報を文字と写真で共有できるようにすることで、スタッフ間の連携や患者さんとその家族の生活の質を向上させることに成功した。

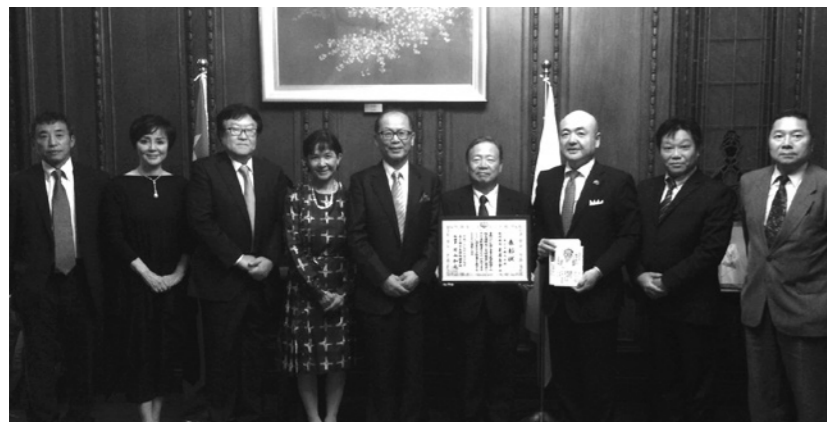
小笠原内科における、在宅医療の質を表す指標と言われる「在宅看取り率」は概ね95%、中でも直近3年間の独居看取り率が約95%という高い数字である。驚くことに小笠原氏の統計によると、看取った独居の患者さんの約9割が家族や馴染みのヘルパー、訪問看護師など「誰かがいるとき」に旅立っていたことが分かった。小笠原氏は、確率上ありえない「いのちの不思議さ」を目の当たりにし、「人は死ぬときを選ぶ」と考えていると語る。また、「在宅ホスピス緩和ケアで苦痛が取れ、患者さん本人の願う生き方・死に方が叶うとき、希望死・満足死・納得死ができた」と遺族も喜ばれ、涙を浮かべながらも「笑顔でピース」をされます。この生き様が「なんとめでたい」臨終である」と、その考え・思いを自身の著書などに綴っている。

小笠原氏はこれまで、地域の在宅看取り医を育てるためには「教育的在宅緩和ケア」が重要であるという考えのもと、かかりつけ医とその患者さんを一緒に診療し、看取りまで伴走することで、苦痛を緩和するためのモルヒネの使い方、心のケア、家族の



■独居（心不全・認知症）の看取り直後、笑顔の娘・孫・ひ孫の皆さんと

ケア、THPケアシステム、オンライン診療（遠隔診療）など、自身が長年培ってきたノウハウを在宅医療の現場で伝え続けてきた。現在は日本在宅ホスピス協会の会長として、たとえひとり暮らしでも、がんや心不全、認知症でも、住み慣れた処で最期まで健やかに暮らせる地域包括ケアシステムをつくり、地域医療に貢献している。そして、名古屋大学全学同窓会岐阜支部長でもある小笠原氏は、名大巡講として上海講演を実施するなどの社会貢献を含め、日本だけでなく、世界の人々が健やかに暮らせる社会を実現するために尽力し続けている。



■名大巡講（講義）のため上海を訪問 星屋秀幸名大参与、葛谷雅文教授、張紹良教授と共に在上海日本国総領事館にて



おがさわら ぶんゆう
小笠原 文雄
 Bunyu Ogasawara

医療法人 聖徳会 小笠原内科・岐阜在宅ケアクリニック 理事長・院長
 日本在宅ホスピス協会 会長
 Chief Director, Ogasawara Internal Medicine / Gifu Home Care Clinic
 President, Japan Home Hospice Association

1948年羽島市生まれ。1973年名古屋大学医学部卒業。医学博士。名古屋大学第二内科(循環器グループ)などを経て、1989年に小笠原内科を開業。日本における訪問看護制度創設3年前より在宅医療と訪問看護を開始。数多くの在宅看取りの経験をもとに、2008年「THPケアシステム」を構築すると共に、情報共有アプリ「THP+」を開発。オンライン診療(遠隔診療)や教育的在宅緩和ケアの実施、講演を通した在宅医療の啓発など、地域医療の分野で貢献。日本在宅ホスピス協会会長、名古屋大学医学部特任准教授、岐阜大学医学部客員臨床系教授など兼務。

推薦者		
松尾 清一	国立大学法人 名古屋大学	総長
門松 健治	名古屋大学大学院 医学系研究科長・医学部長	
濱口 道成	国立研究開発法人 科学技術振興機構	理事長
古田 肇	岐阜県知事	
柵木 充明	日本医師会 代議員会 議長(推薦時)	
吉田 学	厚生労働省 医政局長(推薦時)	

在宅医療と地域医療を追求

健やかに最期まで暮らせる世の中に

在宅看取りにおける小笠原文雄氏の原点は、16歳のとき、原因不明の病に侵された姉(享年20)を家族で病院の表玄関から連れ帰り、自宅で看取ったことだと言う。その後、小笠原氏は医学の道に進むと、循環器内科専門医として研鑽を積み、1989年に岐阜市で小笠原内科を開業、在宅医療と訪問看護を始めた。これは日本で訪問看護制度が創設される3年前のことである。

小笠原氏は約1,500人の患者さんを看取った経験から、在宅医療の現場では、医療・看護・介護・福祉・保健の